

# 保育者養成における保育内容「表現」に関する授業研究 ——描画を題材にして——

細田 八千代\*

\* 帝京短期大学 こども教育学科

## 要 旨

保育者養成校における保育内容指導法「表現」は、単に学生の技能的側面を伸ばすといった目的に留まらず、いかにして学生自身の表現する力を育てるかということを視野に入れながら、授業を行うことが必要である。そこで本研究では、描画を題材として、1つ目は、学生自身が描画を体験し3つの視点で、そのプロセスを自覚的に捉えたレポートを分析・考察する。2つ目は、実際に都内私立幼稚園児（3歳・4歳・5歳）が描いた絵を見て、学生自身がどのようにその絵を読み取ることができたのかを調査した資料をもとに分析・考察する。このことから、保育者養成校における学生は「子どもの表現を読み取る力と同時に自己を表現する力を身に付ける」ということに加え、「学習者と保育者の双方の立場を自覚的に捉える」という系統的、総合的な学習や実習経験ができるようになる必要がある。そのためには、さらなる保育者養成カリキュラムと授業改善が求められる。

キーワード：保育者養成、保育内容「表現」、描画、環境

## I はじめに

2008年に幼稚園教育要領および保育所保育指針が改訂（定）されたことに伴い、2011年には、保育士養成課程の改正も行われ、新たに「保育表現技術」という区分が設置された。保育表現技術系教科目を配置することにより、「従来の『基礎技能』から保育における保育技術を学ぶ科目であることをより明確に示す」という観点から、保育内容「表現」は、「子どもの経験や保育の環境を様々な表現活動に結び付け、遊びを豊かに展開するために必要な技術を習得できるようにする」ことが示されている<sup>1)</sup>。保育者養成における実技系科目は、単に学生の技能的側面を伸ばすといった目的に留まらず、保育者となる学生自身の表現する力を育てるとともに、どのようにして子どもの表現する力を育てるかということを視野に入れながら授業を行う必要がある。すなわち、この表現する力とは、単に歌を歌う、楽器を演奏する、絵を描く、制作をする、絵本やお話を読む、身体で表現する、などの個々の技能面としての表現技術の習得を示すだけでなく、あらゆる五感を働かせながら、人や周囲の環境と関わり、様々な刺激を受け取ることを通して「感じ取る力」である。また、その経験を言葉、音楽、造形、身体などのあらゆる表現媒体を通して「他者に伝える力」である。それは子どもに育ててほしい「表現力」であると同時に、保育者にも求められる「表現力」であるという認識から、保育者養成校における授業実践

では、学生の様々な表現活動を通して「感動を他者と共有する経験を積み重ねる」<sup>2)</sup>ことがねらいとされていると考える。本研究では、子どもの描画を題材として学生は子どもの表現をどのように受け止め、描画の課題に対してどのような意識を持ち自己表現をしているかを分析することによって、子どもの表現する力を育むためには、保育者として必要な表現する力を育てる授業方法を考察するものである。

## II 研究の方法

### 1. 調査期間

平成28年5月～11月

### 2. 調査内容

(1) 描画の課題についての質問紙調査及び学生自身が描画を体験し、3つの視点でそのプロセスを自覚的に捉えたレポートを分析、考察する。

- 1) 描くことの「好き嫌い」とその理由についての質問紙調査
- 2) 描画体験「お弁当の思い出」から3つのレポート課題についての質問紙調査
  - 第一課題：クレヨン画「お弁当の思い出」を「描いた時の気持ちと、その後の気持ちの変化」について
  - 第二課題：クレヨン画と絵の具で「お弁当の思い出」を曲線と直線を使って「描いた時

の気持ちと、その後の気持ちの変化」  
について

第三課題：第一課題と第二課題「描き終わった時の  
気持ちの変化」について

3) 対象：通学課程1年生51名、2年生25名、通信  
課程40名

(2) 都内私立幼稚園児の自由画18枚（3歳児、4歳  
児、5歳児）を見て「子どもの絵を読み取る」

1) 子どもの絵を見て、どのように読み取ったか  
グループ討議により内容の分析と考察

2) 描き終わった絵を子どもに見せられた時、「子  
どもに、どのような言葉を掛けるか」の調査

3) 対象：専攻科3年次24名

### 3. 倫理的配慮

質問紙調査を実施するにあたっては、学生に口頭で  
説明し同意の上で回答を求めた。通信生に関しては、  
一部文章での趣旨説明と研究以外に使用しない旨を伝  
え回答をもとめた。

描画については、学生には、口頭で承諾を得た上で  
使用した。また、子どもの描画に関しては、幼稚園の  
承諾を得て使用した。

## III 結果と考察

### 1. 描画の課題について質問調査

(1) 描くことの「好き嫌い」とその理由についての  
質問紙調査

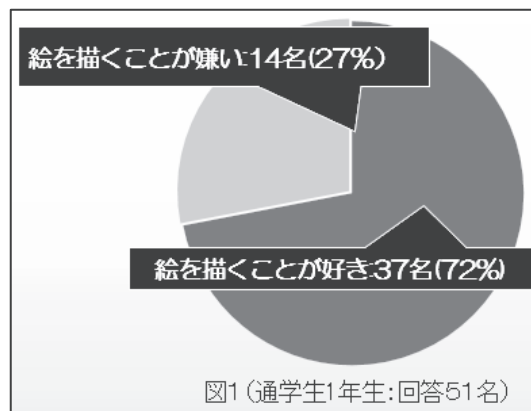


図1. 通学生1年生:回答51名 回答結果

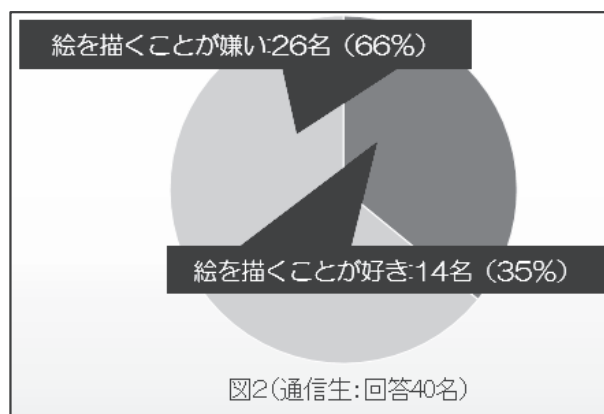


図2. 通信生:回答40名 回答結果

〈好きな理由〉

- ・幼少期に大人からほめられた
- ・自分の世界を自由に描ける
- ・描く機会が多かった

〈嫌いな理由〉

- ・絵を描くことが苦手
- ・描く機会が少なかった
- ・上手ではないという劣等感

「絵をかく」ことの好き嫌いについての質問紙調査  
では、好きと回答した通学生が7割(72%)であっ  
たのに対して通信生は約4割(36%)であった。そ  
の理由は両方とも、もともと得意で幼少期に大人から  
褒められたことを挙げている。嫌いと答えた通学生  
は約3割(28%)で描くことが苦手、得意でない  
としている。一方、通信生で嫌いと答えた学生は6割  
(64%)で、理由は得意でないことに加え、描く機  
会がほとんどないことを挙げている。

次に行った描画の課題について質問紙調査では、描画の題材「お弁当の思い出」について3つの視点でレポート作成を試みた。

第1課題：描くときの気持ち・その後の気持ちの変化  
 <気持ちの変化>

|              | あった | ない  | 無回答 |
|--------------|-----|-----|-----|
| 通学生<br>(51名) | 34名 | 16名 | 1名  |
| 通信生<br>(40名) | 29名 | 10名 | 1名  |

その一つ目の課題「お弁当の思い出」をクレヨン画で描き「描くときの気持ち、その後の気持ちの変化」については、通学生、通信生を合わせると7割強

(74%)が気持ちに変化があったと回答している。その具体的な様態は、(表1)にあるように、題材である「お弁当」の印象や懐かしさを思い出し、描くことへの迷いがあっても子どものころの記憶をたどって描いた楽しさを表している。このように描き始めにおいて大方の学生は、お弁当という親しみやすい題材なので苦手意識があっても達成感を得られたと推察できる。

表1. 学生の様態

| 気持ちに変化のあった通学生の様態   |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・お弁当のおいしかった印象や懐かしさを思い出した (38名)</li> <li>・はじめは迷ったが子どもの頃を思い出しながら描いて楽しかった (33名)</li> <li>・イメージしたことを絵にすることが難しい (13名)</li> <li>・クレヨンでの色塗りは楽しい。(9名)</li> <li>・描くことは苦手なので嫌だったが始めたら楽しくなった (9名)</li> <li>・全く描く気になれない (4名)</li> </ul> |
| 気持ちに変化のあった通信生の様態   |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・お弁当という題材から子どものころを懐かしく思い出した(14名)</li> <li>・クレヨン塗りが楽しい (10名)</li> <li>・つらい気持ちがよみがえった (8名)</li> <li>・自分は下手だと思う (4名)</li> <li>・思い出がないから嫌だ (3名)</li> </ul>  |

第2課題：クレヨンと絵の具で直線と曲線を使って描くときの気持ち・その後の変化  
 <気持ちの変化>

|              | あった | ない  | 無回答 |
|--------------|-----|-----|-----|
| 通学生<br>(51名) | 35名 | 12名 | 3名  |
| 通信生<br>(40名) | 31名 | 9名  | 0名  |

二つ目の課題、クレヨンと絵の具で曲線と直線を使って描き、「描くときの気持ち、その後の気持ちの変化」については、通学生、通信生とも7割弱(69%)が気持ちに変化があったとしている。その具体的な様態は<表2>にあるように、線での表現

は、自由感や絵の上手い、下手にこだわることなく子どもの気持ちを思い出し「お弁当」という題材に取り組めたとしている。さらに「固定概念に縛られることなく」と「直線と曲線のみで」という提示により、自分を解放して描けた学生と、逆に提示の文言にこだわりを感じて難しいと感じた学生もいる。

表2. 学生の様態

| 気持ちに変化のあった通学生の様態  |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・直線と曲線のみで自由に描けたので、うまい下手は関係ない (30名)</li> <li>・お弁当という題材をイメージしながら絵の具を塗る楽しい気持ち (13名)</li> <li>・固定概念に縛られて描けない (12名)</li> <li>・上手い、下手にこだわらずに子どもの気持ちを思い出して描けた (12名)</li> <li>・線で表現することは難しい (9名)</li> <li>・絵の具の使い方が難しい (5名)</li> </ul> |
| 気持ちに変化のあった通信生の様態  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・描いていくうちに童心に返って楽しんだ (12名)</li> <li>・線での表現は気持ちを素直に出せた (11名)</li> <li>・絵の具塗りは自由感をもってできた (11名)</li> <li>・抽象的に描く面白さを感じた (3名)</li> <li>・お弁当のよい思い出がないので、イメージできない (2名)</li> <li>・子どもの頃の悲しい思いが込み上げた (1名)</li> </ul>                    |

第3課題：描き終えたときの気持ち（心の変化）

<気持ちの変化>

|              | あった | ない  | 無回答 |
|--------------|-----|-----|-----|
| 通学生<br>(51名) | 37名 | 10名 | 3名  |
| 通信生<br>(40名) | 33名 | 2名  | 3名  |


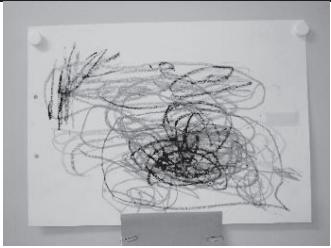
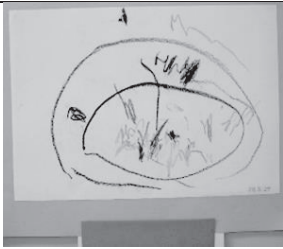
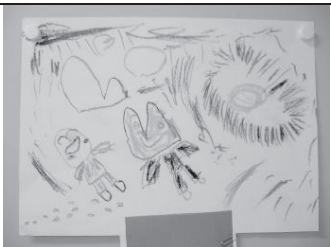
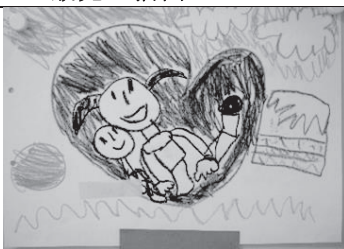
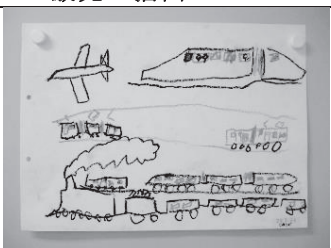
三つ目の課題「描き終えたときの気持ち」については、全体の約8割（82%）の学生が、気持ちに変化があったと回答している。その様態としては<表3>に示すように、絵の具やクレヨンという教材のもつ扱い良さや楽しさを実感したことや、自由に描く子どもの気持ちに気づいたという回答である。一方で通信生

は描くことが嫌いという学生が6割であったにもかかわらず課題終了後には8割の学生に肯定的な気持ちの変化がみられる。その具体的な様態は、描き終わってみると自分にも描けたという自信や満足感を持ち、自己肯定感を得られたという結果である。さらに、少数ではあるが、子どもの自由感や表現の意味などに気づいた学生もいる。半面、苦手意識や感性の問題というより、幼少時の辛い体験が表現する気持ちを抑えている学生の様態もある。

これらのことから、学生にとって「お弁当の思い出」という題材の提示によって表現の仕方が具体化されたと考える。

表3. 学生の様態

| 気持ちに変化のあった通学生の様態   |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 絵の具やクレヨンを思い切り楽しめた（21名）</li> <li>・ 子どもの気持ちは自由で一人ひとり違うと気づいた（14名）</li> <li>・ 感じて描くことが大事だ（12名）</li> <li>・ 線を使って描いたのでイメージしたようにできた（10名）</li> <li>・ 固定概念に縛られて描けない（8名）</li> <li>・ 苦手意識でうまく表現できない（5名）</li> <li>・ イメージしたことをうまく表現できない（2名）</li> </ul>   |
| 気持ちに変化のあった通信生の様態   |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 迷いながら描いたが、自分にも描けると自信がついた（12名）</li> <li>・ 上手い、下手ではなく自由に描いたので満足している（9名）</li> <li>・ 思い切り色が塗れて気持ちよかった（9名）</li> <li>・ もっとこうすればよかったと反省した（4名）</li> <li>・ 記憶にあることは印象として残っていることに気づいた（3名）</li> <li>・ 子どもの表現には何か意味があると気づいた（2名）</li> <li>・ 固定概念をぬぐえない（3名）</li> <li>・ 子どもの頃を思い出したくない。怒りを覚えた（1名）</li> </ul> |

|  | 【どのようなイメージで描いたと感じたか？】   | 【どういう印象を持ったか？】   | 絵を子どもに見せられた時、「子どもに、どのような言葉を掛けるか」                              |
|--|---|--|---|
|  <p>&lt;3 歳児の描画 1&gt;</p>   | <p>「しゃぼん玉みたい」<br/>「ボール」「玉入れ」<br/>「フラフープで楽しんでいる」</p>                                 | <p>「かわいい」「いろいろな色を使っている」<br/>「楽しそう」「一生懸命書いたのが伝わる」</p>         | <p>「何描いたの？」<br/>「きれいな色だね」</p>                                 |
|  <p>&lt;3 歳児の描画 2&gt;</p>   | <p>「自分の好きな乗り物」<br/>「色々な色を使って、様々な気持ちが伝わる」</p>  | <p>「乗り物が好きなことが伝わる」「表現力がすごい」<br/>「たくさんの色を使っている」</p>           | <p>「何描いたの？」<br/>「たくさんの色を使ってきれいだね」<br/>「たくさんの色を使って上手に描けたね」</p> |
|  <p>&lt;3 歳児の描画 3&gt;</p>  | <p>「人の顔」「魚の顔」<br/>「食べている」<br/>「口の中が痛い」「左目が痛い」<br/>「庭で遊んでいるところ」<br/>「魚がご飯を食べている」</p> | <p>「楽しく遊んでいる」<br/>「色で感情を表している」<br/>「かわいい顔」<br/>「悲しそう」</p>    | <p>「上手に描けたね」<br/>「何描いたの？」</p>                                 |
|  <p>&lt;4 歳児の描画&gt;</p>   | <p>「親子、友だちと楽しく遊んでいる」<br/>「天気雨」「明るい色が好き」<br/>「私とママとお花」</p>                           | <p>「楽しそう」「色々な色をつかっている」<br/>「晴れているところと雨が降っているところがある」</p>      | <p>「上手に描けたね」<br/>「色々な色を使ってきれいだね」</p>                          |
|  <p>&lt;4 歳児の描画 2&gt;</p> | <p>「ピクニック」<br/>「家族で遊びに行ったこと」<br/>「外でお母さんと一緒に遊んでいるところ」<br/>「ケーキとかおいしい物を食べているところ」</p> | <p>「楽しそう」「平和」<br/>「赤が多くて温かい」<br/>「お母さんと一緒にうれしい」</p>          | <p>「上手に描けたね」<br/>「きれいな色だね」<br/>「楽しそうね」</p>                    |
|  <p>&lt;5 歳児の描画&gt;</p>   | <p>「乗り物（電車、汽車、新幹線、飛行機）」<br/>「好きな物を描いている」<br/>「家族と出かけた時にみたもの」</p>                    | <p>「乗り物が好き」「細かい所まで描けている」<br/>「3 歳児の絵より何が描いてあるかが、はっきり分かる」</p> | <p>「上手に描けたね」<br/>「乗り物が好きなのね」</p>                              |

<1年生>

<2年生>



図. クレヨン画

<専攻科生>

<通信生>



図. 直線と曲線を使って表現

## 2. 都内私立幼稚園児の自由画18枚（3歳児、4歳児、5歳児）を見て「子どもの絵を読み取る」

(1) 子どもの絵を見て、どのように読み取ったかグループ討議により内容の分析と考察

一つ目は、子どもの絵から感じるイメージについては3歳児の描画では「人の顔、シャボン玉、玉入れ」と線や形を捉えて回答している。4、5歳児の描画では「友達や親と遊んでいる、電車や新幹線などの乗り物、外遊びをしている」と実際に近い描写を捉えた回答である。

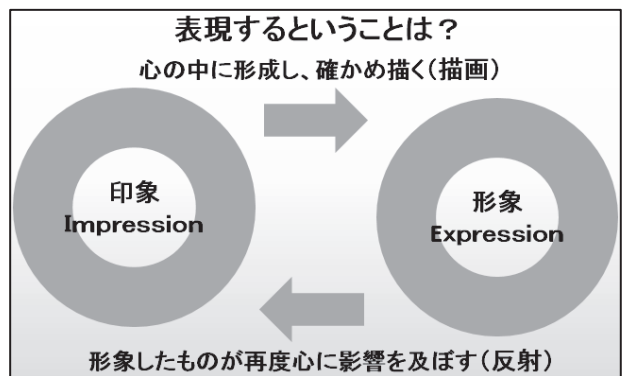
二つ目は、受け止めた印象について3歳児の描画は「かわいい、楽しいイメージで自由に描いている」や「いろいろな色を使って紙いっぱいに表現している」などである。4、5歳児の描画では「全体的に明るい色使い」「渦巻きなど細かい線描写が面白い」などである。

三つ目は、子どもが描き終った絵を保育者に見せたとき「あなたならどのような言葉をかけますか」の問いには、9割の学生が「上手に描けたね」「きれいな

色だね」という共通した褒め言葉である。こうした言葉かけは保育現場でよく耳にするが、子どもによっては「またあの絵を描けば褒められる」とステレオタイプ化、すなわち概念画になる場合もある。このような表現に抑圧があれば新たな表現の素材や手段を提示してみることも必要であろう。さらに学生のほぼ全員が「何描いたの?」と尋ねている。子どもが描こうとしているものが何であるかは大事なポイントである。保育者は子ども一人ひとりの表現の特徴を知ってそれを読み取らなければならない。たとえ、何が描かれているか読み取れない場合であっても、<表3>において少数ではあるが、「子どもの表現には何か意味がある」と気づいた学生もいるように、保育者は子どもの絵から何らかの印象を受け止められるのではないだろうか。すなわち、子どもは自分にとって「意味ある」世界を表現していると考えられるため、その絵を見て何を感じ、その絵に子どもがどのような思いを込めているのかをよみとることができるはずである<sup>3)</sup>。学生は、子どもの自由な発想や表現を支える援助の重要性を認識する必要がある。

## IV まとめと今後の課題

表現するということは、自分が様々な出来事や対象に触れてそのことによって心の中に形成された印象(impression)を外的な形象として外に表わされたもの(expression)である<sup>4)</sup>。このことは、調査(1)の「思い出のお弁当」という題材について過去の体験から印象を呼び起こし、イメージされたことを絵に現したことで確認されたと考える。

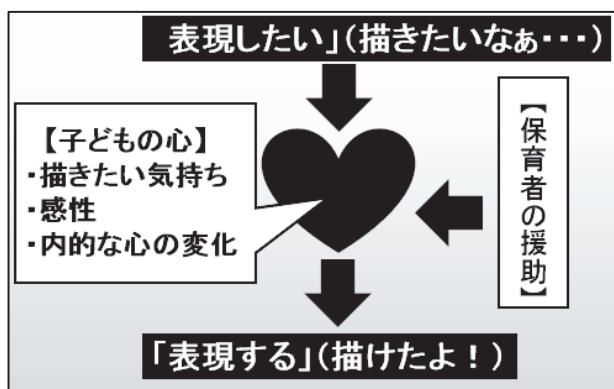


<図 表現するということは?>

一方、調査(2)は、すでに外的な形象として表現された「子どもの絵」を見て学生が何らかの印象を形成している。これらを踏まえると、外的な形象として表出されたものは、再び、人の内なる気持ちに反射され戻ってくるといえる。すなわち、表現と印象とは

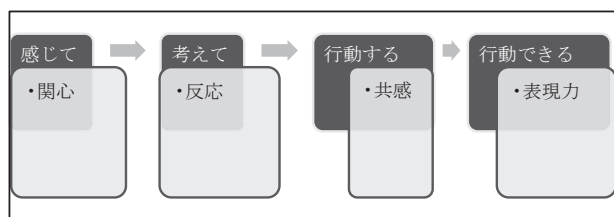
相互関係にあると考えられる。表現という行為の意味は、印象という「内なるもの」の外的な形象という「外なるもの」への転化だけではないということである<sup>5)</sup>。表現することは、自分の「内なるもの」を確かめる作業でもある。

今回の学生の描画は、個々の学生の体験の質によって表現に違いが出たのではないかと考える。また、一人ひとりの違った個性の中で、この体験の質を表現していると考えられる。そこで、保育において保育者に求められることは、子どもたちの対象とのかかわりや体験をどのように作り出すのかということである。



<図 保育者に求められること>

保育者は子どもが「表現したい」という気持ちや内的な心の変化をも共感的に理解して受け止めつつ、「表現する」に至るまでのプロセスをよみとり、各段階において必要な援助をする。そのためには何よりも先に保育者自身が「感じて」「考えて」「行動する」ことができなければならない<sup>5)</sup>。



<図 求められる保育者の資質に必要なこと>

つまり、保育者にとって一人ひとりの子どもの表現を柔軟で的確に受け止める「感性」が大切になってくる。「豊かな感性」は自分以外の存在である他者や周囲のモノと共感することを可能にする。また、「受け止める」とは、まず子どもの表現に関心を示し、共感的に反応することが基本である。子どもが辿る学びのプロセスを学生自身も辿り、その道筋を自覚的にとらえながら自ら「表現力」を習得するために、能動的学習が必要である<sup>2)</sup>。それには、子どもの感性が育つ環

境や保育者の働きかけはどのようにしたらよいのかを具体的に学ぶことが必要である。

**今後の課題・授業改善に向けて**

子どもの感性が育ち、  
自発的に表現活動が行える **環境** は？

↓

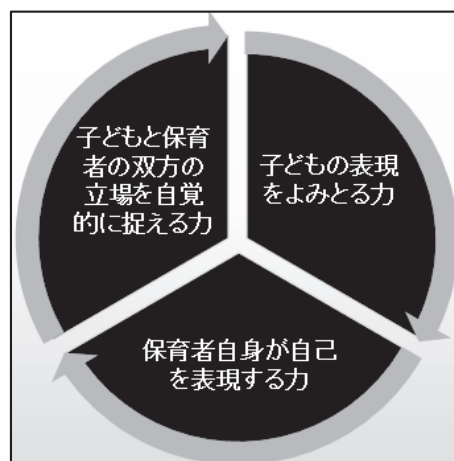
保育者の働きかけは、どうあるべきか。  
豊かな文化や美的価値あるものに、どのように体験するか。

**能動的な学習のためのカリキュラムと授業改善**

<図 環境の重要性>

すなわち、子どもが自発的に表現活動を行う環境はどうあればよいのか、そして豊かな文化や美的な価値に触れさせるにはどうしたらよいかを学習することが大事である。

系統的、総合的な学習や実習体験を通して



<図 保育者として必要な表現する力を育てる授業方法>

保育者養成において、学生自身が子どもの表現をよみとる力と同時に自己を表現する力を身につけることに加え、「学習者と保育者の双方の立場を自覚的に捉える」という系統的、総合的な学習や実習経験<sup>2)</sup>ができるようにする必要がある。そのためには保育者養成カリキュラムとさらなる授業改善が求められる。

### 文献

- 1) 厚生労働省 保育士養成課程の改正について：第4回保育士養成課程等検討資料 3(3), (2010年)
- 2) 岡本弘子 保育者養成校における力量形成としての表現の授業 保育学研究, 51(3), 166-168, (2013年)
- 3) 杉浦篤子 子どもと造形——表現を育てるために



— 藤女子大学紀要, 46 (第Ⅱ部), 101-112,  
(2009年)

- 4) 角尾和子・角尾稔 (編) 表現 川島書店,  
pp.127-131 (1999年)
- 5) 無藤 隆・浜口順子 事例で学ぶ保育内容 領域  
「表現」 萌文書林, pp.37-38, (2014年)
- 6) 平田智久・小林紀子・砂上史子 保育内容「表  
現」ミネルヴァ書房, pp.7-8, (2010年)

#### 謝辞

- ・アンケート調査に協力してくれた通学生 (1年・2年・専攻科)、通信生 (スクーリング生) の皆さんありがとうございました。
- ・描画提供に協力してくれた通学生 (1年・2年・専攻科)、通信生の皆さんありがとうございました。
- ・今回の研究発表のために園児の描画 (3歳～5歳児クラス) を提供して頂きました東京都内私立幼稚園の先生方に心から感謝いたします。
- ・資料づくりに協力してくれた友人に感謝します。

#### 付記

本原稿は、日本保育学会「第70回大会」において口頭発表をおこなった内容に加筆、修正したものである。

# Research Class on the Childcare Content “Expression” in the Childcare Training Program: Using Drawings as Materials

Yachiyo HOSODA \*

\* Department of Early Childhood Education, Teikyo Junior College

---

## Abstract

The childcare content guidance method “expression” in the childcare training program is not limited to the objective of holding classes to enhance the skills of the students, but also to cultivate the students’ ability to express themselves.

Therefore, in this study, using drawings as materials, the first step is to have the students experience drawing for themselves and to analyze and evaluate reports which subjectively interpret the process. The second step is to evaluate the surveyed materials on how the students interpreted the drawings made by private kindergarten children in Tokyo (3, 4 and 5-year olds). From the foregoing, it can be concluded that it is necessary on the part of the students of the childcare training school, not only to “acquire the ability to simultaneously interpret the expressions of children and to express themselves” but also to systematically and comprehensively provide learning and practical training on “subjectively interpreting the positions of both the students and childcare workers”.

To that end, further improvements in the childcare training curriculum and classes are required.

**Keywords :** childcare training, childcare content, “expression” drawings, environment